

## マタイによる福音書 21:12-17

子ロバに乗り、柔和な王として、弟子たち、大勢の人々と共にエルサレムに入城されたイエス様が、そこですぐさまなされたことはまっすぐに神殿の境内に向かうことでした。その時の様子を御言葉は「それから、イエスは神殿の境内に入り」と語るのですが、このように何の迷いもなく神殿の境内に一目散に向かったのがイエス様でありました。ですから、この「ここは私の居場所だ」と言わんばかりのイエス様の姿に、私たちは、神殿がイエス様にとっては勝手知ったる我が家のようなものであるとの印象を持つのです。ところが、イエス様のなされたことは言葉を失うものでもありました。その様子を御言葉は、「そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台やハトを売る者の腰掛けを倒された」と記すのですが、このようにまさに傍若無人とも思える数々の振る舞いをなしたのがイエス様でありました。しかし、もちろん、そこにははっきりとした理由がありました。イザヤ書とエレミヤ書の御言葉を引用し、イエス様自らが「『私の家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしている」と語るように、イエス様の居場所である神殿が祈りの家ではなく、人々の商売道具に成り下がってしまっていたからです。

従って、イエス様のその激しさは、イエス様が神殿の主人である以上当然です。まさに神の子のなせる業であったとも言えるのです。しかし、血管を浮き上がらせ、屋台や店を手当たり次第に当たり散らすその姿に、私たちは、どうしても柔和な王としてのイエス様を見ることができません。それだけではありません。まさに青天の霹靂、イエス様のなされることをただ呆然と見つめている人々の気持ちを思うと、胸が締め付けられるような気持ちにもなるのです。それゆえ、私たちはイエス様に心を閉ざすか、あるいは、この出来事に目を塞いで見なかったことにするか、そのいずれかを選択することにもなるのでしょう。しかし、イエス様の宮清めと言われているこの箇所は、共観福音書と言われているマタイ、マルコ、ルカに加えて、それとはまったく異なる霊性を持つヨハネによる福音書にも記されているのです。それは、イエス様のこの宮清めと言われている出来事が相当の衝撃をもって人々に受け止められたか

らです。従って、イエス様について何かを語る上で、決して外すことのできないものがこの宮清めの出来事でもあります。そこでイエス様の怒りを理解するためにも、その当時のエルサレムの様子を振り返りたいと思います。

そこで先ず見えてくるものはエルサレム神殿の賑わいです。神殿に詣でることはエルサレム在住のユダヤ人だけではなく、世界中に散らされたディアスポラのユダヤ人にも同じように求められていることだったからです。そして、それは、彼らにとって生きるということが神様を信じることであり、神様を信じるということは求められる義務を十分に果たすことでもあったからです。ですから、このディアスポラのユダヤ人の信仰生活を支えるため、その門前には、様々なサービスが用意されておりました。古くから犠牲の献げものを扱う店や、神殿税を献げるための両替人の店が立ち並んでいたのはそのためです。そして、それは、長い巡礼の旅においては、ハトや羊などの犠牲のための動物を連れて歩くことは困難であり、また、神殿税を納めるためには、ユダヤの通貨であるシェケル銀貨を用いることが必須条件でもあったからです。しかし、いつの時代においても不当な振る舞いをなす者はいるものです。中には巡礼者の足下を見て、不当に利益を上げている者もいたことでしょう。ですから、イエス様が強い調子で小商いをなす人々を責めているのは、そのような不法行為を咎めてのことであつたとも考えられます。また、脇目も振らずに一目散に神殿の境内に向かつて行ったところから、イエス様は予めそのような情報を掴んでいたとも考えられます。けれども、これらのことについては御言葉が何も語ってはいない以上、憶測だけで物事を語るわけにも参りません。

そこで一つ心に留めたいことは、ディアスポラのユダヤ人にとっては、そうした商売人の手助けなしには巡礼の旅は終えることができなかったというこの事実です。従って、そうした商売は昨日今日のものではありません。幼き日、父母に連れられ神殿に詣でたイエス様も、神殿の境内のそうした状況は目の当たりにしたはずなのです。それゆえ、その当時とこの時とがまったく異なる状況に置かれていたはずもありません。ですから、イエス様の宮清めは、神の

子として最後の一週間を歩むその使命感がそうさせたとも言えるのです。けれども、たとえそうであったとしても、それで私たちは、ああそうか、と納得することはできません。なぜなら、イエス様のその姿は、私たちにとっては見たくないものであり、それゆえ、不愉快極まりないものでもあるからです。

そこで、御言葉がイエス様の宮清めの出来事に加えて、他に二つのことを語っていることから、他のところを見ても、一つは、神殿の境内にいた目の見えない人、足の不自由な人たちのことを癒やされたということが語られています。ここにイメージ通りのイエス様の姿を見ることができ、私たちはホッとさせられもするのですが、もう一つは、イエス様を見つけて無邪気に喜ぶ子どもたちの姿と、そのことへの不満を訴える律法学者の姿です。ここにまた、イエス様の優しさとその毅然とした態度を見ることができ、私たちは気持ちを取り戻すことができます。けれども、この二つの出来事と、まるで濡れ落ち葉のようにピタッと張り付いて離れないのが、この宮清めの出来事であるわけです。このことはつまり、十字架は、宮清めの出来事の中だけに現されているものではなく、ここに記されているその一つ一つに同じように照らし出されているということです。それゆえ、個々の出来事を切り離し、自分好みのイエス様だけを見つめるわけにはなりません。けれども、そこにまた私たちの混乱の理由があるのです。

乱暴なイエス様と柔和なイエス様、そして、はっきりと自分の考えを貫く力強いイエス様、このそれぞれの姿は、こうして御言葉に聞いている私たちにとってはすぐに一つにはつながることはありません。それゆえ、御言葉に聞いている私たちは思うのです。私たちはイエス様の一体何を知っているのか。また、御言葉はイエス様の何を私たちに告げ知らせようとしているのか、そう思うしてしまうのです。そこで、この宮清めの出来事が四つある福音書のすべてに記されていることから、もう一度、一から考えるべく、この宮清めの出来事を見ていくと、見れば見るほど、この理不尽とも思えるイエス様の振るまいに躓いてしまうのです。このたった一度のことによって、私たちがこれまで積み上げてきたイエス様のイメージがガラガラと音を立てて崩されるような気持ちにもなるのです。しかし、つながらず、イメージが壊されたと嘆くばかりでは、イエス様への理解が深まることもありません。従って、そう考えると、イエ

ス様への理解を妨げているものはイエス様の側にあるのではなく、やはり私たちの側に何か問題があるということです。

そこで、自分に何か問題があると言われると、私たちはどうしてもギクッとしてしまうわけです。自分に何か倫理的、道徳的問題があるのではないかと考えてしまうのです。ましてや、それが十字架と関わっている以上、長く御言葉に親しんできた者であればあるほど、余計にそう思うってしまうわけです。そして、そう考えるのはもちろん思い当たるところがあるからです。我欲を捨て去ることができず、それがために様々な問題を孕んでいるのが私たち人間であるからです。そして、その根本的な問題は、私たちが神様の望むことを願うのではなく、自分の満足、納得ばかりを願ってしまうということです。そして、それが善男善女でもある巡礼者たちでありました。ですから、そう考えるなら、宮清めと言われているこの出来事は、神殿を商売道具にしている人たちのことだけを問題視しているわけではありません。イエス様が「強盗の巣」と仰るように、巡礼者たちの願いの多くが「お願いします、神様、こうしてください。私もいい子になりますから」といったものであるように、つまりは、人々の信仰の中心にあったものは神様との取引であって、それが神殿における日常であったということです。

このように神殿の日常を取り巻いていたものは、まさに仏作って魂入れぬ状況でありました。そして、それがイエス様が十字架へと向かう最初の日に語られているということは、つまりは、その神殿に命の息を吹き入れようとしたのがイエス様であり、まただから、十字架という命を切り開く道がここから切り開かれることになったということです。ですから、ここでのことを通じて明らかにされているのは、十字架を理解するためのその方向性です。なぜなら、イエス様がもし、私たちが望むような柔和な仮面だけを被り、物事を穏便に穏便に済ませるようなお方であったなら、恐らくは、十字架の出来事は決して起こるはずもなく、それゆえ、十字架によって命に至る道も決して開かれることもなかったはずだからです。そして、私たちがそう言えるのは、私たちが十字架と復活の出来事を知っているからでもあります。ところが、それが分かっているながら、イエス様を信じる私たちは、イエス様のこの激しい一面に触れ、狼狽えてしまう、それはどうしてなのでしょう。

その理由の一つが先ほども申しましたよ

うに、イエス様というお方が分からなくなるからです。そして、分からなくなるのは、私たちには、イエス様はこういう方だとの決めつけと思ひ込みがあるからです。そして、この決めつけと思ひ込みは、イエス様が自分のためになるお方であり、自分の望むことを必ず満たしてくださるお方でもあるということです。このように、ねばならないという揺るぎない理解が私たちにはあるのですが、しかし、御言葉は、私たちのそうした思ひ込みが単純に間違っているということを言いたいわけではありません。三つ子の魂百までと言われるように、そういう幼さを手放すことができずにいるのが私たち信仰者でもあるからです。そして、その上で、その私たちの一生と深く関わってくださっているのが私たちのイエス様であり、ですから、私たちがこうして御言葉に聞いている限り、その生涯において、何度も何度も、このイエス様に躓くことにもなるのです。けれども、それ自体は大きな問題ではありません。むしろ、躓かない方が問題なのです。それは、この躓きこそが大事なのです。なぜなら、躓きは十字架のイエス様と私たちとの距離をより縮めるものでもあるからです。

イエス様が私たちに望んでおられることは取引を通じての互いの適度な距離感ではありません。それゆえ、私たちはイエス様の顔色を伺う必要もありません。それは、イエス様には、私たちを思考停止の状態に置き、意のままに従わせるお考えはないからです。つまり、十字架へと向かうイエス様には、私たちにこうなって欲しいといった欲はないということです。なぜなら、もし、イエス様に私たちと同じような欲があったのなら、十字架ほど無意味なものはないからです。それは、私たちがその日常において考え、また願うもののすべては、十字架によって何一つ実現することはなかったからです。十字架に向かって歩む私たちが信仰者という仮面を被る必要がないのはそのため、それは、イエス様がそうであるように、生まれたままのその姿をもって十字架に向かい、イエス様とその歩みを進めているのがこうして御言葉に聞いている私たちであるからです。ところが、多くの巡礼者や、神殿境内の商売人たちと同じように、それに満足できない、それが私たちのもう一つの姿でもあるのです。

イエス様に躓くからこそ、私たちは我が身を振り返ることになるのですが、ですから、イエス様の怒りが私たちの信仰的成長に深く関わっているのは間違いありません。けれども、十字架と復活の出来事を経

ても、なお、私たちは、その与えられたままに満足できずにいるのです。巡礼者と同じように、神様と取引をし、力を得たいと願うのです。そして、それは、自由になりたいからです。あれもこれも、全部できるようになりたいからです。そして、それは、私たちが不自由な毎日を生きていると思っているからです。けれども、その私たちがイエス様の怒りに触れ、躓き、それでもイエス様のいますその場所にこうして戻りたいと思うのはどうしてなのでしょう。それは、自分の戻るべき場所を見失わずにいるからです。では、私たちがそれでも見失わずにいる、この戻るべき場所とはどんな場所なのでしょう。私たちは、この、それでも、との思いをより確かなものとするために、こうして礼拝に集い、御言葉を聞いているわけですが、その御言葉がイエス様と共に向かわせようとしているのが十字架の道でもあるのです。

前回も申しましたように、十字架へと向かうことによって、私たちは自らのその姿、罪に傷つき、この罪によって正しく絶望することになるのです。ただし、絶望しつつも、そのまま終わることはありません。それは、イエス様の十字架と復活の出来事を知らされている私たちは、イエス様から直接慰めを受けることになるからです。そして、そのために必要なものが、ここでイエス様の仰っている祈りの家なのです。祈りの家とは、ただ私たちが恨み言を言い、呟くだけの場所ではありません。神様との確かな繋がりが許されている場所であり、神様に向かってすべてが開かれている場所なのです。そして、この祈りの家が私たちの居場所であり、それを深く知るために、私たちはこれより十字架の道を歩もうとしているのです。それゆえ、十字架の道は祈りの道であり、自分の満足、納得を得るために活動の場ではありません。神の子を失うという経験が私たちを深く傷け、絶望させるように、十字架の経験はすべてを失う、具体的な体験でもあるからです。けれども、だからこそまた、そこで私たちは見出すのです。それが神様の救いであり、赦しでもあります。そのために私たちに唯一残されているものが祈りなのです。

祈っても願っても一向にその思いが聞かれる気配すら感じられない、それが十字架の道を歩むということでもあるのです。こうして私たちの絶望は深まり、私たちは自らを見失い、深い孤独を味わうこととなります。そして、それが恐ろしいのは、その可能性がすべての者に開かれてい

るということです。偉い人にも、頭のいい人にも、お金のある人にも、そして、信仰篤いと目されている人にも、すべての人がその可能性を持っているのです。十字架はこの点を私たちに明らかにしてくれているわけですが、ところが、イエス様の復活によって、この絶望は取り除かれ、大きな希望が示されたのです。そして、それは、人々の篤い祈りの力によるものではありませんでした。イエス様自らが絶望する弟子たちの前に現れ、神様と私たちとの関わりが閉ざされていないことを知らしめてくださったからです。私たちの御心だと信じるその祈りがそのまま御心とされていくのはそのためでもあります。それは、神様のいます天が閉ざされてはいないからです。絶望し、ただ御旨がなることだけを信じ祈り続ける中で、私たちがなお祈り続けることができるのは、このように神様に向かって天が大きく開かれていることを知っているからです。そして、それは、篤い祈りを献げる私たちのみに許されていることではありません。神様が造られた世界にこうして共に住むすべての人々、あらゆる命に許されていることでもあるのです。

しかし、それが分かっているながらも、私たちはイエス様を自分のためだけのイエス様であって欲しいと願ってしまうのです。けれども、イエス様を仮に自分という小さな籠に押し込めることに成功したとしても、それが必ず破れることを十字架は私たちに教えてくれています。ですから、イエス様の怒りはこの点を示してくれているように思うのです。そして、私たちがそれを実感するのはイエス様と共に十字架を共にするからです。ただし、私たち自身が身をもって明らかにするように、一度や二度、経験したからといって、なるほどそうかと言った具合に、十字架はその頭で分かるものではありません。繰り返し何度も経験し、我が身に染みてこそものであり、この赦しと救いの経験を通して、天と地がつながっていることを私たちは実感することになるのです。ですから、そういう意味で私たちに求められていることは、ナイーブな信仰ではありません。傷ついても傷ついても臆することなく祈り続ける信仰です。イエス様が幼子のようにと言われるのは、まさに幼子というものがそういうものであるからです。そして、その私たちの祈りが世に共感を持って受け止められるのは、この祈りの中に現されるものが、神を愛し、世を愛し、隣人をも愛する私たちの信仰でもあるからです。そして、その力を私たちは私たちの住まうこの祈りの家で与えられて

いるのです。

従って、この日の御言葉、このイエス様の怒りが示すことは、神学的な意味での聖書の正しい理解、倫理道徳的な正しい振る舞いを求めていることではありません。求められていることはイエス様に躓き、絶望することであり、そこで尚、見捨てられてはいないと思える救いの経験です。それゆえ、イエス様の怒りは天と地とを閉ざそうとして発せられたものではありません。天と地とを繋ぎ、切り開くためのものであり、それが怒りとなって現されたのは、イエス様が私たちすべての者を愛し、天へと繋げようとしているからです。それゆえ、この怒りを私たちが経験すればこそ、イエス様の柔和な姿は一層鮮明なものとなるのです。なぜなら、イエス様の赦しとその救いが人種、宗教、国家を超えてあらゆる人々に開かれているように、イエス様の怒りによって私たちの固定観念、思い込みが打ち砕かれるその時、私たちの心はイエス様と共に神様と隣人に向かうことになるからです。

ですから、私たちの居場所である祈りの家を仏作って魂を入れない状況に貶めないためにも、祈りの家をイエス様の怒りから逃れの場、言い訳や言い逃れの場所とするわけには参りません。その信仰をもってイエス様の赦しと救いの満ちあふれる場所として整えるべく努めたいと思うのです。そして、そのために私たちに求められていることは、イエス様との再会を果たすその時までを共に歩み続けることなのです。特に、信仰を取り巻く状況は日増しに悪化してきている現状にあっては、自らの信仰を証しすることは、困難が伴うものでもあります。けれども、私たちの信仰の真実は、十字架がそうであるように困難な中で証しされてきたものでもあるのです。そして、私たちにはそれを証しする力があるのです。それは、躓く私たちは、躓くからこそイエス様の救いを経験するからです。そして、そのためにイエス様は私たちと十字架を共にしてくださっているのです。ですから、私たちの誰もが望むこの命に至る道が目の前に開かれていることをもう一度しっかりと心に留め、神様の赦しと救いを経験し、こうして与えられている信仰を自分のものとしていくためにも、イエス様と共に、十字架に向かって共に歩みを進めて参りたいと思います。祈りましょう。